

## 熊谷幹雄先生を支えた人々

## 熊谷幹雄先生を支えた人々

岩高 昭和30年卒

プレアンOB 三浦孔司

熊谷幹雄先生は、大正4年1月24日北海道で産声をあげられ、旧制岩中、早稲田大学をご卒業後、他の学校の教諭を経て、昭和21年4月6日旧制岩中そして昭和23年4月1日付けで現在の山口県立岩国高等学校の教諭に就任されました。

それから昭和43年7月16日に53歳でご逝去されるまでの22年間の、マンドリン合奏を中心としてどんな合奏団と交流し、そこには、どんな人のお名前が出て来るのか、熊谷先生の寄稿と写真それに記憶に残る日常の会話から、ご活動を辿ってみることにしました。

### 岩国高校プレクトラム・アンサンブルが誕生するまで



熊谷先生は、次に掲載する樋口先生と寄宿舎の舎監も務めておられ、終戦直後の食糧難に襲われ、着る物もなく、教室はいうまでもなく寄宿舎もガラスは破れたまま板をあてがって風を防ぐといった、どこを見ても心の潤いとなるようなものはない状況の中で、計画実施されたのがプレアンの前身たる舎内演芸会だったのです。

その時の舞台準備では、それまで沈滞していた雰囲気が一気に変わり久々に少年らしい生気を漂わせて嬉々とした様子に、“これだけでも良かった”と話し合ったとか。

岩中ハーモニカアンサンブル



### 樋口渡 先生

先ず出てきたのが、樋口渡先生。熊谷先生より1年先に赴任され、図画を担当された先生で、昭和23年に制度改革で岩国高校に変更になった時に、錦帯橋の一部を取り入れた校章を作成されました。

しかも岩高プレクトラム・アンサンブルのバッチも製作された方と記憶しています。

その外にも、職員室前の廊下に貼り出した樋口先生作のポスターが、私が在学中の昭和27年～30年には、部室に記念として残っていました。

### 石神正 校長先生



プレクトラム・アンサンブル誕生に切っても切り離せないのが、石神校長先生です。

昭和24年12月24日 石神校長先生にご出席をいただき、“聖夜”の合奏を演奏して、これから本格的なマンドリンクラブを作りたいので、先ず合奏楽器の手始めにマンドラを買っていただくことを懇願して、苦勞の末、かつて昭和15年に初めて就職先となった呉市の中山楽器店で1本の中古楽器を入手できて、その後岩国の植野楽器店でも1本の中古楽器を入手できたのだそうです。

ちなみに、校長先生のご令嬢も部員だったのです。

これで少しずつでも合奏形態が出来上がり始めたことで、クラブ一同の生気が読み取れるというものです。

### 福島淳 先生



翌年の昭和25年6月25日に記念すべき第1回の定演を開催していますが、その後の定演も含めて、音楽担当の福島淳先生と岩高混声合唱団にはご協力をいただきましたし、熊谷先生の病氣療養中に出くわした二度の定演では、生徒の相談や指揮者の代役まで引き受けていただいたとか。その二回とは、昭和36年14回定演と昭和42年20回定演とのこと。

### 吉田矢健治さん 村本新一さん

吉田矢健治さんと云えば、明大マンドリンクラブ出身でキングレコード専属の作曲家で、熊谷先生と同じ川西のご出身だったとか。プレアン第2回定演では氏の作曲された“組曲 支那の印象”が演奏されています。



その後も何度か帰郷の折、昭和31年前後だったと思いますが、プレアンを訪問の際に、私も名刺を頂戴した記憶が残っています。

他にも村本新一さん（昭和18年旧制岩中卒）も、プレアン第1回定演から第5回定演まで賛助出演をされております。

### みどり会と三浦武さん

熊谷先生の学生時代での活動になりますが、早大に入学された昭和8年夏のこと、地元の川西に熊谷先生の発起で結成された音楽クラブなのです。

このことは「岩国プレクトラム30年史」に寄稿していただいた近所在住の三浦武さんの一稿に綴られています。

その活動は、主としてハーモニカを中心とした合奏体により昭和10年まで継続されました。

早大を昭和13年にご卒業になりましたが、在学中の半分を地域の音楽活動に充てられたことになります。

この楽団の発表会の背景幕に使ったのでしょうか緑色の“みどり会”とか言う2畳敷ほどの大きさの幕が、私の在学中に部室の棚に収納されていたと記憶しています。

### 三戸武さん（プログラムには、健史とあります）

岩高プレアンは昭和24年に結成され、翌25年6月に初回の定演を開催していますが、賛助、援助の方々の大きな力添えがクラブを支えていたのです。

第1回から第4回まで毎回三戸武さんのアコーディオン演奏が記載されております。

“岩高プレクトラム・アンサンブルの歩み”の熊谷先生の記述では、岩国市高森在住で、昭和14年旧制岩中卒業後、早大に進み在学中から既に東宝の専属となって、有楽町の日劇のステージなどでの演奏は、高い評価があったとか。戦後大陸から帰還されていたところでしたが、母校のことならと出演をご快諾いただいたそうです。



第2回定演の写真です。

前列に、石神校長先生、衛藤公雄さん熊谷先生と三戸武さん村本新一さんも拝見することができます。

### 衛藤公雄さん



昭和25年12月3日の第2回プレアン定演には、箏（こと）の名人たる衛藤公雄ご夫妻が、熊谷先生とのフツした約束を守り、わざわざ東京からご参加いただき、特別演奏までしていただいたと感謝感激、いまではオリンピックの金メダル級の感動を抱かれた様子が伺えます。

衛藤公雄さんとの橋渡しは、石神校長先生のお知り合いで柳井で箏の教師をしておられた増本先生の絶大なお力添えがあつてのことだそうで、前記を見ても人と人とのつながりは、利害を超えたところに力強く生きているものですね。

氏は、1924年（大正13年）大分県生まれの箏の奏者であり邦楽の作曲家です。

### 大野繁さん

多分、昭和26年のことだと思いますが、熊谷先生は、折よく帰郷された吉田矢健治さんと出会い、先生が学生時代に知っていた楽器製作者の大野繁さんが富山県高岡市に疎開されているというを紹介され、早速マンドチェロとギタローネの製作を依頼され、8月に大野さんご自身、お弟子さんを伴って楽器をもって来校されたのだそうです。

その時の喜びが“岩高プレクトラム・アンサンブルの歩み”に残されています。

その後もプレアン、個人ともに大野製のオールド大野を多数購入したと思います。

### 安富信美さん

前記の大野繁さんに続いて、熊谷先生の心の奥深く残った恩人といえるもう一人の人が安富信美さんなのです。

前記の第1回目の記念誌に詳しく残していらっしゃいますが、早大マンドリンクラブの数年後輩の方で、東京で「コスモス音楽芸術研究所」を主催しておいでだったそうです。

プレアンは誕生できて楽器も揃い始めた頃に、次の懸案は、合奏曲の楽譜が極めて入手困難な時代に、驚くなかれ安富さんが貴重で得難い譜面を無償でどしどし送って下さったと感謝の記述が残っています。

私は、この原稿を書きながら思い出すのは、熊谷先生のご自宅も近かったせいで卒業後は度々訪問しているんな話を聞かせてもらったものですが、当時はほとんどの楽譜が手書きであつて、その中から次の定演曲あるいは練習曲を選別して、さらにパート譜をご自身で万年筆で写したり、ガリ版刷りして部員に手渡していただいていたね。

そんな貴重な楽譜と四重奏ができる四本の楽器、中には前記の大野繁さんからプレゼントされた

熊谷幹雄バージョンとも言える糸巻き部分が“立琴”の形をしたマンドリンと、演奏会のソロには使わせていただいたヴィナッチャ製マンドリンなど、跡取りのなかった先生の貴重なお宝は、その後どのように処理されたのか、いまだに頭から離れません。

### 比留間きぬ子さん



以前熊谷先生の近所の住民だった吉田矢健治さんから大野繁さんを紹介され、その大野繁さんが比留間きぬ子さんと交流があって、岩高プレアンのことが話題になったことから、昭和27年3月に比留間きぬ子さんが四国への演奏旅行の途中、突然熊谷先生宅を驚愕訪問されたとのこと。

ご存知の通り父比留間賢八さんが、日本に初めてマンドリンを紹介された方なのです。

比留間きぬ子さんは、その後昭和27年10月岩国の“音楽文化協会”主催と翌年には三菱レーヨン大竹工場で演奏会が開催され、その帰りにプレアン部室で“旅愁”を演奏されたそうです。

比留間先生は、ネットで見ると日本マンドリン界の最高権威者で、東京都と芦屋市に比留間マンドリン音楽学院を開設されていたとのことでした。

昭和27年と言えば、私が6月に入部した年なのですが、まだまだ関心が薄かったのか、この辺のお話は耳に残っていないのです。

余談になりますが、わたしの1年後輩の長島啓君が卒業後進学のために上京し予備校に通っていたころ、彼もマンドリンに没頭していて比留間先生の門下生になりました。その後関西に居を移されたと聞いています。

それにしても衛藤さん大野さん安富さん比留間さんが、熊谷先生を訪ねて来岩されたということは、当時の状況からして、情報連絡は、手紙か電話、交通機関は国鉄の夜行列車ということでしょうから、時間と費用負担を考えるとよくも田舎のマンドリン活動にご協力を戴けたものですね。

### そのほかの方々

昭和33年年11月 プレアン#11 定演のプログラムに、熊谷先生のお礼のご挨拶で紹介されているお名前を掲載してみましょう。

川崎貞利さん：早大マンドリン楽部指揮者      小島克己さん：広島マンドリン楽団指揮者

沢村泰昌さん：早大 MG/OB 広島マンドリン楽団所属

こうして見ると、ご縁というものは、人と人との繋がりとなっているものですね。

この辺も、熊谷先生のクラブ活動の別の大きな目的ではなかったのかなと思うのです。

しかし、残念なのは、小島紘一郎さんです。

昭和37年と昭和39年にプレアンの #15、#17 定演にギターソロで賛助出演されているにも拘らず情報が全然つかめませんでした。

## 私の近所の先輩たち

その名前は吉岡さんと申します。

先輩たちと表現すれば、全員苗字が違うとして話を聞き始めますが、どっこい例外中の例外とでも申しませうか、全員兄弟の話なのです。

しかも5人の男兄弟の内、中の3人についての思い出を記してみたいと思います。

まず、近所といっても家の裏庭から往来する方が表より近いような位置関係ですが、私が、中学生の頃によく、私より2つ年下の五男坊と遊びはじめたように記憶しています。

そして、岩高に入学して、肺炎にかかり担任が熊谷先生だったことから、運動系の私がプレアンに入ったことが兄弟との交流に繋がってゆきました。

しかし入部した昭和27年6月頃は1歳年上でギターを弾く四男史雄さんがプレアンにいることも知りませんでした。しかし、その後は、定演でのマンドリン独奏のギター伴奏もしてもらったりして近づくことができました。

順番として次は三男の良三さんのことになります。良三さんは、三歳年上になります。

良三さんがマンドリンを始められたのは、昭和23年6月頃、当時付設中学3年だった彼を、熊谷先生はテストケースとして熱意をもってレッスンに取り組み、メキメキ腕をあげられたそうです。これに意を強くされた先生は、プレアンを正式なクラブ活動として岩国高校マンドリン楽部に導いて行かれたのです。

これから私の推測が入りますが、良三さんがマンドリンを始められたのは、三つ年上の次男寛さんの影響ではないかと思うのです。寛さんは、神戸商大でマンドリンクラブに入っていたのか、その辺の影響かな。

寛さんは、プレアンの第4回と5回の定演にも賛助出演され、私が2年生の時の第6回定演で小池正夫作曲の“古戦場の秋”を演奏していますが、その楽譜を寛さんが熊谷先生に提供されたように記憶しています。

かくの如く、家は岩高グラウンドに面して熊谷先生の情熱の大きな力添えになった兄弟のお話です。岩高プレティ初代会長を務めて頂いた富沢元生先輩は、吉岡良三さんの同級生なのです。

## 昭和24年12月24日から昭和29年までをまとめてみると、

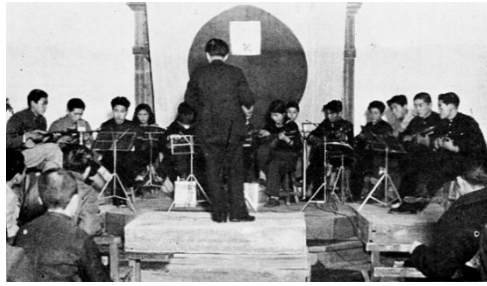


昭和25年

キジア台風により崩壊

岩高プレクトラム・アンサンブルが誕生した頃の我が国の状況は、熊谷先生の記述にもあるように、社会は荒び経済は混乱が続いていた頃に当たりますが、昭和25年に朝鮮戦争が勃発して、日本は戦争特需に支えられ経済復興に向かっていました。

しかし、左の写真が示すように、台風によって錦帯橋は流され通学路は遮断されて、吸江道路を通るか渡し船その後は、仮橋での通学となっていました。



昭和25年2月 予餞会

そんな中、熊谷先生のクラブ活動の確立に向けての努力を見聞きするにつけ、そこには並々ならぬものを感じざるを得ません。

先の寄宿生のこと吉岡良三さんの指導をはじめ、合奏ができるまでの個人指導に重点を置かれていたようですが、私が入部した頃（昭和27年）は、部員が少なかったこともあり傍についてご指導いただきましたが、1年後輩からは、プレアンの人気上昇に伴い入部者も増えて、先生直々の教則本練習も3年生が手掛けるようになりました。

確かオデルの36番が弾けるかどうか合奏への垣根だったと思います。

そして次第に合奏に力点が移っていたように思えます。

### 放送局のラジオ放送

昭和23年4月の制度改革による新制高校で器楽合奏のできる例は極めて珍しかったためか、放送局のラジオ放送に出演しています。

昭和25年と26年には、NHK 広島放送局から4回の放送があり、昭和25年には、米軍岩国基地のFENで放送されたそうです。昭和32年には、ラジオ山口から2回、RCC 中国放送から1回の放送がされています。

### 昭和27年から昭和43年7月までの校外での活動について

残念ながら私は、進学・就職で岩国を離れることになりましたので、資料不足は止むを得ませんが、写真とプログラムとCD録音盤を基に振り返ってみることにしましょう。

前項の放送の件ですが、その後の出演はTV放映になりました。

昭和38年には、NHK ラジオコンクール山口県予選1位になっています。

昭和40年にRCC 中国放送、昭和41年には、NHK 山口から放映されています。



これは余談になりますが、手先が器用だった私は、家にあったケヤ木の破片を見つけて、マンドリンとギターの模型を手掛けてみたところ、“中々いいじゃない”との評をいただき、10分の1程度のマンドリンを作って帰宅途中の先生にプレゼントしたことを思い出しました。

「へー、こんなこともできるのか」と。勿論マンドリンケースも手作りです。写真は、手元に残っている60余年前のマンドリンとギターです。

それでは、校外での活動を見てみましょう。

岩国での活動は、東洋紡績岩国工場のマンドリン・オーケストラと帝人岩国工場のマンドリンクラブの指導をされていました。

昭和27年プレアン#5定演には、東洋紡績のマンドリン・オーケストラとの合同演奏が載っています。

昭和29年から昭和33年の間に5回ほど、岩陽フィルハーモニック・マンドリンオーケストラの合同演奏会が開催されています。岩高プレアンと東洋紡績MOと帝人MCの合同です。

次の写真は、昭和29年6月20日の#1岩陽フィルハーモニック・マンドリンオーケストラの合同演奏会の写真を掲載しておきました。



東洋紡績MOとは、昭和27年と昭和31年の演奏会の記録しか見当たりませんので、いつまで続いたのでしょうか。

ここまで書いて一週間経ったころ、フト甦ったお名前は、阿部英昭さんです。

先生との会話の中でのことなのですが、東洋紡績MOの一員で、作曲も手掛けていらっしゃったとか。

そこで、岩高プレアン定演のプログラムを手繰ってみたところ、昭和30年#8定演から昭和42年#22定演に4曲が演奏されていました。

中でも“案山子の歌”は、お名前とセットで記憶棚にソッと。練習もしたかな。

60年も前の話で自信はありませんので、間違いはご容赦ください。

帝人MCについては、熊谷先生はプレアンOBを連れて、定期的に練習に参加されていたりしました。発表会はもちろん、広島県の八本松には、帝人八本松病院が運営されており、その慰

間によく参加したものです。それは、昭和26年から昭和38年までは、記憶や写真が残っています。リーダーは、上森一乃さんだったと思います。



先生のフザケ

昭和33年に#3 和木マンドリン・アンサンブル出演、その他の年には、小中校、昭和45年に同志社との合同、昭和41年～43年 広大、山口短大、鳥取大との交歓演奏会の記録がありました。

### 岩国マンドリン・オーケストラ

岩高プレクトラム・アンサンブルOBにより、昭和33年4月1日に発足しました。

昭和30年頃でしたか、毎年春休みには、母校に集い熊谷先生を中心にして懐かしい部室で同窓会形式を楽しみにしていました。

回数を重ねるに伴って、“OBでの演奏会もしたいなあ”ということに至り、多数の出演者が望める夏休み（まだ空調のない時代）に、第1回目を昭和33年8月24日 東共用講堂で開催したのです。

熊谷先生の指揮もご逝去の1年前の昭和42年まで続いていました。

クラブの名称は、岩高プレクトラム・ソサエティ→岩国プレクトラム・ソサエティ→岩国市民マンドリンクラブ→岩国マンドリン・オーケストラと変遷しています。

### 沢村泰昌さん

広島出身で早大MGの後輩にあたる沢村さんとの交流開始は、何時だったのか確かではありませんが、昭和33年プレアン#11 定演プログラムで紹介されていて会話にも出ていた方でした。

最近広島でのご活躍経歴について入手した情報によれば、昭和36年に広島ヴィタリチオ・マンドリーノを立ち上げ、同年11月11日に第1回定演が開催されて、岩高プレティも賛助出演しています。その時のプリモトップは前田幸重さんと云って、明大MCのOBで素晴らしい技術の持ち主だったことが印象深く残っています。

プレアン定演（昭和36年#14と昭和37年#15）には、広島ヴィタリチオ・マンドリーノの賛助出演が載っていました。

### 周音連マンドリンクラブと河村太郎さん

河村太郎さんは今では、岩国マンドリン・オーケストラに欠かせないメンバーの一人なのですが、記録によれば、昭和41年5月と翌年に岩高旧講堂で開催された、岩高プレアンと周音連マンドリンクラブの交歓演奏会において、周音連MCの指揮者として登場されたことでした。

周音連MCとの交流は、昭和37年～41年まで続いた模様です。

熊谷先生にとっては、翌年の昭和42年には、プレアンの定演の指揮も病気により福島先生にゆだねる状況になり、校外活動最後の交流となりました。

### 総括してみると

こうして熊谷先生の22年間の岩国でのマンドリン活動を総括すれば、昭和21～昭和24年は、寄宿舎生の課外教育としてハーモニカアンサンブルに注力され、昭和24年～昭和27年は、プレクトラム・アンサンブルの合奏の基礎を作るための期間に当たり、ご自身の早大OB関係者あるいは地元の関係者およびプレアンOBの力添えで、思いもしないスピードで合奏体は出来上がっていったのではないのでしょうか。

えてして人の目は、発表会、演奏会、個人や合奏体の演奏レベル、地域活動などの表向きに関心が向かうものですが、その舞台裏とでも申しましょうか、損得を抜きにした多くの人々の関与、協力があってこそこの思いに至りました。

それから昭和43年の終焉の年までは、地域の先導者として後継の団体との連携を図りながら、マンドリン界に貢献されたのです。

いかにも計画的仕上げとでも言えるかのように、先生没年の前の年（昭和42年11月3日）に岩国市から文化功労章が授与され、53歳で終焉を迎えられました。

日盛りを 木陰ゆきませ 永の旅 母隆子 92才

以上

### 熊谷先生略歴

|       |       |              |
|-------|-------|--------------|
| 大正 4年 | 1月24日 | 北海道で誕生       |
| 昭和 8年 | 3月 2日 | 旧制岩国中学校卒業    |
| 昭和13年 | 3月25日 | 早稲田大学卒業      |
| 昭和13年 | 4月 5日 | 呉港中学校教諭      |
| 昭和15年 | 1月20日 | 岩国町立岩国商工学校教諭 |
| 昭和20年 | 3月31日 | 県立岩国工業学校教諭   |
| 昭和21年 | 4月 6日 | 県立岩国中学校教諭    |
| 昭和23年 | 4月 1日 | 県立岩国高等学校教諭   |
| 昭和43年 | 7月16日 | 没（行年53才）     |

【参考資料】

岩国高校プレクトラム・アンサンブル定演への賛助出演ほか

- #1 回 昭和 25 年 6.25 独唱。ピアノ独奏。岩高混声合奏団。  
ギター独奏/村本新一（昭和 18 年 旧制岩中卒）  
アコーディオン独奏/三戸 武（昭和 14 年 旧制岩中卒）
- #2 回 昭和 25 年 12. 3 岩高混声合奏団。アコーディオン独奏/三戸 武。  
箏曲/衛藤公雄。独唱。  
合奏曲 支那の印象/作曲 吉田矢健治（昭和 16 年 旧制岩中卒）
- #3 回 昭和 26 年 6.17 アコーディオン独奏/三戸 武。岩高男声合奏団。独唱。
- #4 回 昭和 26 年 11.11 岩高混声合奏団。帝人合唱団。独唱。  
アコーディオン独奏/三戸 武。山パル合唱団。  
合奏譜面などを提供/安富信美（早大友）。
- #5 回 昭和 27 年 11. 2 岩高女声合唱団。東洋紡岩国工場マンドリン・オーケストラ。  
独唱。ギター独奏/本田 彪。
- #6 回 昭和 28 年 11.15 岩高混声合奏団。独唱。
- #7 回 昭和 29 年 11. 7                    "               "
- #8 回 昭和 30 年 11. 6                   "
- #9 回 昭和 31 年 11.18                   "
- #10 回 昭和 32 年 11.24               "               独唱。
- #11 回 昭和 33 年 11.23               "
- #12 回 昭和 34 年 10.18 独唱。
- #13 回 昭和 35 年 10. 9 岩高混声合奏団。
- #14 回 昭和 36 年 10. 8 岩高混声合奏団。ビタリーチオ・マンドリーノ。ピアノ独奏。
- #15 回 昭和 37 年 10.14 ビタリーチオ・マンドリーノ。ギター独奏/小島弦一郎。
- #16 回 昭和 38 年 10.13 岩高混声合奏団。  
NHK ラジオコンクール山口県予選 1 位。
- #17 回 昭和 39 年 10. 4 岩高混声合奏団。独唱。ギター独奏/小島弦一郎。
- #18 回 昭和 40 年 10.10
- #19 回 昭和 41 年 10. 9
- #20 回 昭和 42 年 10.15 岩高混声合奏団。  
昭和 43 年 7.16 熊谷先生逝去。
- #21 回 昭和 43 年 10.13